

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19530597
 研究課題名 (和文) アサーションの視点から見た保育者の変容プロセス—自主的事例検討会の活動を通して—

研究課題名 (英文) The Process of Change in Childcare Providers from the Aspect of Assertion -Through Voluntary Case Studies -

研究代表者

柴橋 祐子 (SHIBAHASHI YUKO)
 千葉工業大学・情報科学部・准教授
 研究者番号：20348155

研究成果の概要 (和文)：(1)保育者の「語り」から、同僚や保護者との関係が保育者の意欲や保育そのものに大きな影響を及ぼすこと、変容の過程において自己表現の重要性への気づきが見られ、園の風土が保育者の自己表現を支えることが見出された。(2)(1)の内容を参考に保育者版アサーション尺度を作成し、質問紙調査およびフィールドワークを通して、保育者のアサーション特徴およびそれらと保育への意欲との関連性を明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：(1) Analyses of “stories” regarding issues that the childcare providers had to face revealed that their relationships with colleagues or parents had greatly affected their approach in childcare itself and that there was awareness of importance about self-expression in the process of change. It was also found that atmosphere of nurseries helps their self-expression. (2) An assertion scale for childcare providers was created according to the findings obtained in (1), and a questionnaire survey and fieldworks were conducted. The relationships between motivation of childcare providers and atmosphere of nurseries or colleagues/parents were assessed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：アサーション 保育者 変容プロセス 自主的事例検討会 アサーション・グループワーク

1. 研究開始当初の背景

保育現場では、子ども、保護者の多様化や保育へのニーズの高まりを背景に、保育者のメンタルヘルスの問題が注目されつつある。とりわけ、学校教員と同様に、重層的な人間関係は保育者にとってもストレスと深く関連し、保護者や同僚、管理職との関係性は保育者の適応に影響を及ぼすだけでなく、保育という仕事そのものの質をも左右する点で、きわめて重要な問題といえる。こうした中で、保育者が自分自身の気持ちや考えを状況に即し、ていねいに率直に伝え、問題の解決に向かえるかどうかはきわめて重要な課題であり、保育現場においてこれまで指摘されてきた「同僚性」、「相互支援的關係」と深く結び付くと考えられる。こうした自己表現のあり方は「アサーション」とよばれ、互いの自己表現を尊重する対人関係のあり方を指す。これまで保育者のアサーションに焦点をあてた研究はほとんど見られない。保育者はどのような場面でどのような自己表現の問題を感じているのか。さまざまな経験の中で悩み、振り返りながら、どのように保育者は適切な、その場に即した自己表現を身につけていくのか。保育者の直面してきた具体的な場面の収集を重ね、それをを用いた保育者同士のディスカッションの活性化をめざす中で、保育者のアサーションの意義を明らかにしていくことが必要であり、こうした問いに対する基礎的資料の蓄積が求められる。また、これらをベースに保育者のアサーションの特徴を客観的に把握することにも努め、保育現場の風土や個人の自己表現能力と保育者の意欲ややりがいとの関連を明らかにすることが求められる。

2. 研究の目的

本研究では、保育者のアサーションの意義を明らかにし、その支援に向けた基礎的資料を得るために、(1)保育者の自主的な語りを通してアサーションの視点から保育者の変容プロセスを検討すること、(2)質問紙調査および(3)フィールドワークを通して保育者のアサーションの特徴や促進要因を明らかにすることを目的とする。具体的には、(1)では保育者が直面している自己表現（アサーション）に関わる場面、問題を取りあげ、それを乗り越えるプロセスを検討し、変容の契機となる背景、共通点を見出す。(2)では、保育者版アサーション尺度を開発し、保育者のアサーションの特徴および、保育者の人間関係を取り巻くアサーションの諸側面と保

育者としての意欲・充実感との関連性を明らかにする。また、(3)フィールドワークにより、自己表現が保育の現場において果たす役割とそれを支える職場の組織体制に関する具体的な手がかりを見出すことを目的とする。

3. 研究の方法

(1)「語り」の分析：自主的事例検討会を計 10 回開催した。参加者の了解を得て語られた内容をボイスレコーダーに記録した。各回の参加者は 5~6 名でほぼ同じメンバーから構成され、所用時間は約 2~3 時間。テーマは特に制約は設けず、保育上直面している問題やその悩みを自由にとりあげ、話し合う場として位置付け、参加者に説明し、了解を得た。毎回、逐語録を作成し、自己表現に関わる場面を抜き出し、保育者の気づきややりとりを含めてその具体的なプロセスについて検討した。また、アサーション・ワークショップを 3 回実施し、了解を得てグループワークの様子をビデオに記録した。参加者は各回ともに幼稚園、保育園の保育者 15 名程度で、所用時間は 2 時間である。また、終了 1 週間後に自由記述式アンケートを行い、ロールプレイで取り上げた場面およびグループワークの感想を収集した。

(2)質問紙調査：(1)で得られた内容を参考に、具体的な項目の検討を行い、保育者版アサーション質問紙を作成した。調査協力者は、A 市立幼稚園全 14 園に勤務する幼稚園教員全員 (151 名) で、調査用紙を配布し、郵送による個別返送を求めた。回収率は 91.3% (137 部) で、回答漏れのあった 5 名の回答を除き、最終的に 132 人を分析の対象とした。園の風土認知、他の保育者との関係におけるアサーション、保護者との関係におけるアサーションの 3 つの側面から因子分析による検討を行い、信頼性、妥当性を検討し、尺度化を行った。保育者の経験年数、職務上の立場、異動後の年数を独立変数とし、これら 3 つの側面の得点の比較を行った。さらに、これまでのアサーション研究の知見をもとに園風土、他の同僚との関係におけるアサーション、保護者との関係におけるアサーション、及び意欲・充実感の相互関連性についてモデルを立て、共分散分析を用いて検討した。

(3)フィールドワーク：協働的で意欲的な保育者集団として実績・定評のある W 保育園

において3年間にわたるフィールドワークを実施した。その記録をもとに、さらに(2)の質問紙調査による結果との比較、およびインタビュー調査を行い、園の運営方針が保育者の自己表現の場をどのように保障し、保育者の意欲・やりがいを支えているのかについて焦点あてその具体的な手がかりを探究した。

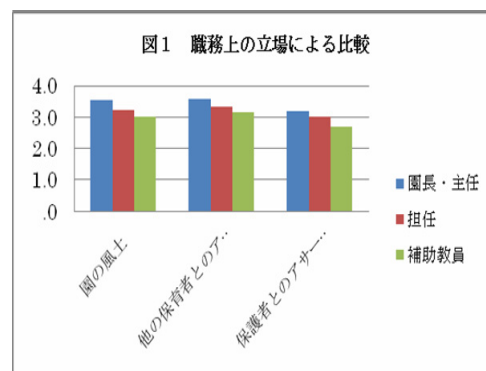
4. 研究成果

平成19-21年度の研究計画について次のような成果を得た。(1)語りの分析から：自主的事例検討会における保育者の「語り」の記録をもとに、保育者が日常的に直面している自己表現に関する内容、場面を抜き出し、分類した。その結果、①他の保育者との関係(わからないことを尋ねる、援助や助言を求める、注意や意見を言う)、②園全体のやりとり(困っていることやうれしい出来事を共有し合う、子どものこと互いに話し合い、アドバイスし合う、注意し合う)③保護者との関係(労いや感謝の気持ちを表す、保育に関する考えを率直に保護者に伝える、子どものことについて配慮しながら気になることを伝える)、の3つに大きく分けられた。また、事例検討会の主要なメンバーの一人であったA保育者の「語り」のプロセスについて分析を行った。当初は、自分の考えを他の保育者や保護者にわかってもらうことの難しさが何度も繰り返し語られていたが、検討会においてその気持ちを表現し、受け止められる経験の中で、自分と他者の考えは違うことに気付き、自らの自己表現を振り返るような発言がたびたびみられるようになった。さらに、問題を共有しようとする働きかけが職場でたびたび試みられるようになり、時間をかけてあきらめずに関わり続けるうちに保育者同士が困り感も含めて遠慮せず自己表現し合うようになったことが報告された。また、時に厳しい意見に戸惑いながらも、互いにアドバイスを受けとめ保育をするようになったことが生き生きと語られるようになった。振り返りのインタビューでは、大変な時に検討会でのやり取りが大きな支えとなったことが語られ、互いの自己表現を尊重し、葛藤を抱えながらも保育をオープンにしていくことの大切さへの確信が語られていた。A保育者以外の保育者の語りについては分析途中であるが、自主的事例検討会を通して、同僚や保護者との関係が保育者にとって保育そのもの

にも大きな影響を及ぼすことや保育者のメンタルヘルスと自己表現が深く関わっていることが示唆され、保育者のアサーションの意義とそれを支える要因を示す具体的な資料を得た。

(2)質問紙調査の結果：(1)で得られた内容を参考に保育者版アサーション尺度を作成し、質問紙調査を実施した。質問紙調査の結果をまとめると以下のとおりである。

①保育者版アサーション尺度は、「園の支援的・交流的風土」、「他の保育者とのアサーション」「保護者とのアサーション」の3つの側面からなり、「園の支援的・交流的風土」および、「保護者とのアサーション」は1因子構造であった。また、「他の保育者との関係におけるアサーション」は3因子構造で、各因子を「嬉しさやつらさの表明」、「提案・意見の表明」、「他の保育者の表明を望む気持ち」と命名した。「意欲・充実感」は1因子構造であった。これら4つの尺度の得点化を行い、以下の分析を進めた。②職務上の立場(園長・主任、担任、補助教員)を独立変数、「園の支援的・交流的風土」、「他の保育者とのアサーション」「保護者とのアサーション」の3つの尺度得点を従属変数として一要因の分散分析を行ったところ、「他の保育者とのアサーション」、「園の支援的・交流的風土」、「保護者とのアサーション」のすべてで有意差がみられ、すべて園長・主任、担任、補助教員の順であった(図1)。



また、「他の保育者とのアサーション」の下位尺度別では、「提案・意見の表明」は園長・主任、担任、補助教員の順に高く、「他の保育者の表明を望む気持ち」は担任が補助教員よりも高かった。③「園の支援的・交流的風土」、「他の保育者とのアサーション」「保護者とのアサーション」の3つの尺度および「意欲・充実感」を含めた各得点の相互関連性について、先行研究を参考にモデルを作成

し、共分散構造分析を用いて検討した。その結果、「園の支援的・交流的風土」は、「他の保育者とのアサーション」に影響し、それを介して「意欲・充実感」及び「保護者とのアサーション」へと結びついていることが示された。こうした結果から、保育者間のアサーションを育てることの重要性、およびそれを支える園風土の重要性が見出されたといえる。この成果の一部は第 20 回日本発達心理学会大会において発表した。

(3) フィールドワークの結果：W 保育園の園運営に焦点当てたフィールドワークから、保育者の自己表現(アサーション)が日常的に、さまざまな機会や仕組みを通して尊重され、それが保育者の意欲ややりがいを支え、保育の質を高める上で不可欠な要素となっている様子が見出された。また、率直な自己表現を肯定する雰囲気作りを園長やベテラン保育者が率先して行うことの重要性が見出された。具体的には以下の4つの側面に分けて、その特徴を指摘した。①保育者間のコミュニケーションの保障と促進、②表現の機会の保障と促進、③ベテラン保育者の役割、④園長の姿勢と保育観。なお、詳しい成果については 2010 年度淑徳大学総合福祉学部紀要を参照のこと。

以上、本研究では保育者にとってのアサーションの意義とそれを支える要因を多面的なアプローチを用いて検討した。保育上の悩みや喜び、自分の意見や考えを伝え合える職場であるかどうか、あるいは、保育者自身が同僚や保護者へ自己表現できるかどうかは、保育上の様々な困難を切りぬける力となり、保育者の成長や意欲、やりがいを支えることが示された。この成果は、保育現場の協働的風土の形成、および保育者自身の自己表現(アサーション)を後押しすることが保育者支援の一つの重要な要件となることを示すものといえるであろう。また、保育者養成の段階においても一人ひとりの表現を尊重し合うことの大切さを知り、率直に自己表現し合う関係性を育むことは、保育者としての資質の育成につながるものと考えられる。最後に、本研究の残された課題を述べる。保育者の変容のプロセスは十分に解明されたとは言えず、今後さらに詳しく語りの分析を重ね、その姿を生き生きと描き出す作業を重ねる必要がある。また、自らの自己表現のありようを振り返り、他の保育者と話し合うことで得られる気づきは、保育の場にどのように還元され、活かされていくのか、それをまとめ、保育現場にフィードバックすることが残されたもう一つの課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

① 榎英子、柴橋祐子 保育の職場と自己表現—自己表現を大切にする保育園でのフィールドワークから— 淑徳大学総合福祉学部研究紀要、査読無、2010、87-103

② 柴橋祐子 けんかつ早い子にどうかかわるか 児童心理、査読無 2009、第 900 巻、67-71

③ 柴橋祐子 アサーションの視点からいじめ不登校を考える 児童心理、査読無 2008、第 877 巻、59-64

④ 柴橋祐子 児童虐待に関する文献の概観—2000年から2006年までの雑誌特集号を対象として— 千葉工業大学研究報告人文編、査読無、2008、第 45 号、37-48

⑤ 榎英子 実践力の育成を目指すカリキュラム開発の試み—保育者養成校における「造形表現指導法」の授業での取り組みを通して— 東横女子短期大学紀要、査読無、2008、第 42 巻、105-121

[学会発表] (計 3 件)

① 當銀怜子、柴橋祐子、砂上史子、高梨智子、中澤潤、中澤小百合、榎英子 浦安市における保育カウンセラーの設置と課題Ⅱ 日本保育学会第 62 回大会、2009 年 5 月 16 日、千葉大学、発表論文集、17

② 柴橋祐子・榎英子 幼稚園教師の自己表現(アサーション)と意欲・やりがいとの関連 日本発達心理学会第 20 回大会、2009 年 3 月 24 日、日本女子大学、発表論文集、346

③ 當銀怜子、柴橋祐子、砂上史子、高梨智子、中澤潤、中澤小百合、榎英子 浦安市における保育カウンセラー制度設置と課題Ⅰ 日本保育学会第 61 回大会、2008 年 5 月 16 日、名古屋市立大学、発表論文集、632

[図書] (計 2 件)

① 中澤潤(編著) 発達心理学の最先端 柴橋祐子 第 8 章 老年期、237-254、およびアサーシントレーニング 209 を担当

② 榎英子 保育を開く造形表現、萌文書林、2008、205

[その他]

<http://www.niye.go.jp>

柴橋祐子 平成 20 年度全国青少年育成相談集会報告 分科会「心理教育的アプローチとしてのアサーション」、国立青少年教育振興機構ホームページ、2008

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴橋 祐子 (SHIBAHASHI YUKO)

千葉工業大学・情報科学部・准教授

研究者番号：20348155

(2) 研究分担者

中原 美恵 (NKAHARA YOSHIE)
東洋大学・ライフデザイン学部・教授
研究者番号：30337703

(3) 研究分担者

槇 英子 (MAKI HIDEKO)
淑徳大学・総合福祉学部・講師
研究者番号：20413099